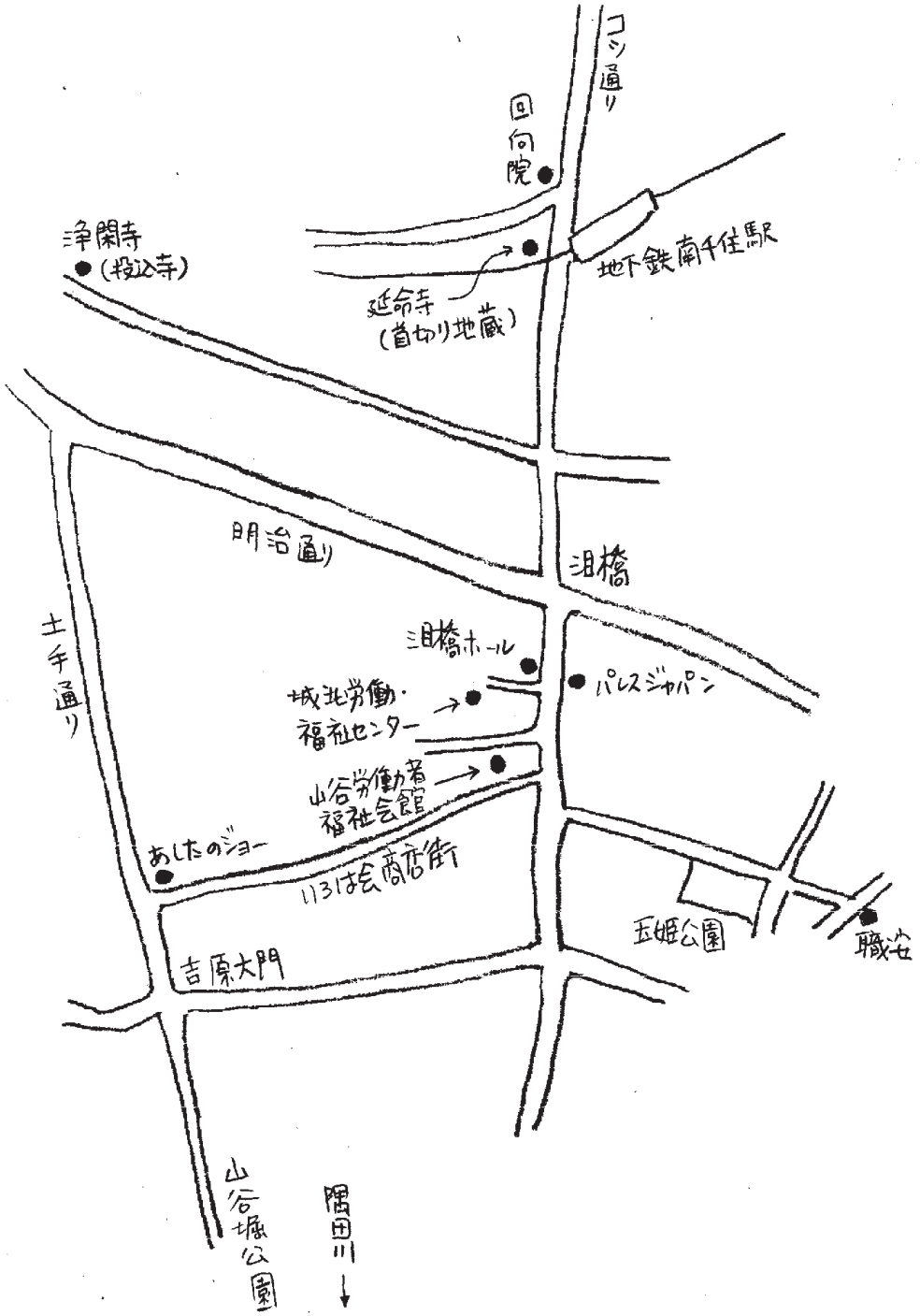
泪橋から「世界」がみえる

——日雇い探偵ヒガシの事件ノート

こみ 憲


コシ通り
回向院
浄閑寺
(投込寺)
延命寺
(首切り地蔵)
地下鉄南千住駅
明治通り
土手通り
泪橋
泪橋ホール
パレスジャパン
城北労働・
福祉センター
山谷労働者
福祉会館
あしたのジョー
いろは会商店街
吉原大門
玉姫公園
職安
山谷堀公園
隅田川

〈登場人物〉

ヒガシ探偵……山谷に小さな事務所を構える探偵だが、普段は日雇い労働者として働いている。元・警察の巡査部長。
ご隠居……若い頃、日本中を放浪していたが、結婚を機に就職。つれあいと母親の死をきっかけに退職・引退、五十歳という若さで隠居となる。八つぁん、熊さんが住む古いアパートの大家。
八つぁん……山谷の日雇い労働者だが、ドヤではなく、ご隠居のアパートに居住。
熊さん……山谷の日雇い労働者で、八つぁんと同じくご隠居のアパートに住む。モガキに襲われた無法松と親しい。
無法松……山谷の日雇い労働者。自称・乱れ太鼓を夏祭りなどで打つのが趣味。のち、バードウオッチングに目覚め、これまた自称「野鳥の会」山谷支部の会員を名乗る。昔、反原発の運動を支援したことがある。モガキに襲われ、瀕死の重傷を負う。
モガキ二人組……山谷の路上強盗。無法松を襲撃した犯人。
赤シャツと坊主頭……山谷の日雇い労働者。熊さんや無法松の呑み仲間。
タカハシユウコ記者……中堅の新聞社の女性記者。山谷を取材に来たことがきっかけで、ヒガシ探偵、八つぁん、熊さんたちと親しくなる。
オカさん……山谷の日雇い労働組合のメンバー。池谷荘にある組合事務所はヒガシ探偵事務所と隣同士。
Yさん……大阪・釜ヶ崎の活動家。
Kさん……横浜・寿町の活動家。
Iさん……反原発グループ「野鳥の声」の元活動家。現在、横浜の寿町在住、生活保護を取得。
サチ……家出少女。
暴走族のリーダー……サチが家出したときに一時かくまってくれた。
H組長……広域暴力団のS会傘下の組員三十名を擁するU組の組長。U組は覚醒剤密売を主なシノギとしていて、M警部から覚醒剤の買い取りをもちかけられる。
M警部……上級職の警部。指揮していた事件の不始末が重なり、閑職に追いやられる。なかば発作的に証拠品倉庫の覚醒剤を盗み出して、H組長に売ろうとする。
麻薬取締官ヤマダ……ヒガシが警官時代に少林寺拳法を習いに行ったときに親しくなった。大がかりな麻薬密輸が行われる横浜港近くの横浜分室に勤務。
絵描きのクロキさん……山谷で日雇いをしながら絵描きをしている。フランス・パリへの渡航経験あり。一枚の画の完成に執念を燃やしている。

第一部

1

山谷には「泪橋」という交差点がある。しかし、そこには橋もなければ川もない。寄せ場の山谷だから、丹下段平やマンモス西によく似た者は見かけるが、「あしたのジョー」はいない。

いやいや、そうじゃない。十年前に、ジョーの等身大のフィギュアがいろは会商店街の出口のところにできたんだった。でもなぜだろう、泪橋のある山谷口のほうではなくて、吉原口に立っている。ちょっと行けばかつての新吉原の入口の大門（おおもん）があるのだ。

世界には十八種類のペンギンがいて、そのすべてが南半球に住んでいるそうだ。ペンギンだって十八種類いるんだから、「あさってのジョー」や「しあさってのジョー」ぐらいいてもいいのに。でも、南極ペンギンはいるが、北極ペンギンはいない。

「ガード隣りの刑場跡へまぎれ込む……ちょうど私の頭の上、根元から切った女の髪の毛や嬰児の涎（よだれ）掛けをつるした地蔵尊の鉄門に、菩薩大悲弘請願　不惜身命（ふしゃくしんみょう）度衆生と彫りつけてあるのが、昼間ならはっきり読めるはずだ」（武田鱗太郎「好きな場所」『蔓延する東京都市底辺作品集』所収）

※「大悲」とは、衆生の苦を救う仏、菩薩の大きな慈悲。また「不惜身命」とは仏道のために身も命もささげて惜しまないこと。

地下鉄南千住駅の南口から出ると、すぐ向こうに寺が見える。昼間はだいたい門扉が開いている。ひょいと中に入ると、右側には大きな地蔵が鎮座している。右手に錫杖（しゃくじょう）、首にはよだれ掛けをした首切り地蔵である。「史跡小塚原（こづかっぱら）刑場跡」という文字が目に入る。とはいえ、江戸時代の刑場は公開で見物人もあったし、ずいぶんと広かったに違いない。いまの南千住二丁目あたりが小塚原刑場というから、ここから泪橋の近くのほうまでが刑場だったんだろうか。この寺の名前は延命寺という。

その前の通りを歩いて行くと、寺院の門の横に穏やかな面持ちのお地蔵さんが立っている。「吉展（よしのぶ）地蔵尊」とある。「戦後最大の誘拐事件」と言われた吉展ちゃん事件、もう半世紀以上もたつが、その吉展ちゃんを供養する地蔵尊である。ここが小塚原回向院。

「小塚原の回向院には、橋本左内や吉田松陰をはじめ、桜田門外の蹶起（けっき）者なぞ、幕末志士の墓が多い。時々、私はここに詣でて、何とはなしに、彼らの死が若かったことに感慨を催したり、独りでうなづいたりしている」（武田鱗太郎「同」）

以前は、吉田松陰や橋本左内の墓は境内にバラバラにあったと記憶しているが、いつの間にか一か所に集められている。この史跡エリア（？）には、ほかにも江戸時代の侠客「腕の喜三郎」、毒婦と言われた「高橋お伝」、直侍と呼ばれた「片岡直次郎」、それに「鼠小僧次郎吉」の墓が並んでいる。

異質な新参者もいる。なぜか「カール・ゴッチ之墓」。アウトロー四人組の墓の横に、見るからに新しい立派な墓がたっている。プロレスファンならご存知だろうが、日本の多くのプロレスラーを育てたことで有名。墓碑銘の下には、アントニオ猪木（彼もいまや同じ世界の住人だ）と西村修の名前がある。十年前の新参者である、あしたのジョーのフィギュアとは、まったく違った思いもするが、山谷は多くの参入者をのみ込んできたところだ。これもまたよしとせねばなるまい。

とはいえ、ここは、無念さを抱え死んでいった、そして殺された者の場所だ。ずいぶんと時を経たとはいえ、その思いが薄れてなくなるものではなかろう。今でも、そこかしこにうじゃうじゃと霊が漂い飛び交っていて、夜ともなればどこからか「恨めしや」とお出ましになっても不思議ではない。しかしながら（残念ながら）、こちとら夜は酔っぱらっているせいか、向こうが敬遠しているのか、いまだ出会ったことがない。

この回向院の前の通りを以前は「コツ通り」と言った。刑場跡とコツとは、いわく因縁がありそうな名。場所のコヅカッパラのアタマからとったともいわれるが、でも、やっぱりコツとは「骨」じゃないのかい？

「お直し」という落語がある。元花魁（おいらん）の女房と若い衆の亭主の、まあ平たくいえば男のやきもちの噺。五代目の古今亭志ん生で有名な艶笑噺なのだが、その舞台がここ千住のコツというところ。

――元は吉原の花魁と、客引きの若い衆の夫婦、はじめはよかったが、やがて男の道楽で家財道具も売り払う一文無しに。にっちもさっちも行かなくなった男が言うには、コツで蹴転（けころ）の見世をやろうと。コツの見世とは、近くの吉原とは大違いの場末、ケタオチのしろもの。

「（若い衆は俺がやるけれど）女はおめえがやるのさ。あそこはひどい女ばっかしで、おめえなら掃きだめに鶴ですぐに売れっ子さ」と。まあひどい話だが、背に腹は代えられず、女房は渋々承知する。しかし、やきもちは絶対に駄目と念を押したあと、「頃合いを見計らって〝お直しだよ〟って声を掛けるんだよ。そうすれば（時間が延びて）二百が四百、六百と上がって行くんだから」「お直しね」と亭主。「よさそうなのが来たら通せんぼして、ぐいぐいこっちに引っ張って来て、蹴とばして見世に入れて、転がしてあたしの前へ持って来るんだよ」。こんなやりとりのあと、亭主は何とか酔っ払いの職人風の男を捕まえて見世の入口まで運んで来たが……。

廓（くるわ）噺といえば、もうひとつ、舞台は吉原や千住のコツではなく品川だが、川島雄三監督でフランキー堺主演の「幕末太陽傳」という傑作がある。これも「居残り佐平次」や、「品川心中」「三枚起請（きしょう）」「お見立て」などを拝借してつくられた映画だ。

さて、落語には、武士に対する町人の反骨心いっぱいの演目が少なくない。両国の花火見物で、侍に脅かされた町人が、逆に刀を奪い取り、相手の首を中天にスパーンと飛ばしてしまう「たがや」などはその最たるもの。

でも、女郎に対しては視線がけっこうキツイのである。女郎は客から金を巻き上げること

に血道をあげる、一方、庶民？である客は金を吸い取られるばかり。すると搾取される哀れな男のほうへ情がわいてしまうのか。女たちの生きてきた背景にはあまり目が向かない。

そこへいくと、勝新太郎の「座頭市」は違う。女郎は極貧・下層の出ゆえに、売り飛ばされて、搾れるだけ搾り取られ、苦界に沈む。極悪非道は、ヤクザ、そして裏で甘い汁を吸う役人、女を売り買いする女衒（ぜげん）などの輩。顚末はワンパターンといえばワンパターンだが、この「三悪」が、座頭市によって徹底的に粉砕されてしまう大立ち回りとなる。そう、座頭市は下層の救世主、ヒーローなのだ。キューバで「座頭市」が大人気だったというのも何となくわかるのである。

話がもうだいぶ脇にそれてしまったようだ。ならば、「えい！」と時間を巻き戻して、三十年と少しばかり前の昔に還ってみよう。

この物語はバブル景気がまだはじけていない一九八九年から始まる。

「てえへんだ、てえへんだ」。いきなり戸をガラっと開けて八つぁんが入って来た。七分のズボン、上は灰色の作業着、地下足袋こそ履いていないが、頭には手拭いを巻いた格好はいかにも日雇い労働者風。ごつい体躯の上に乗っかった四角張った顔にはどんぐり眼（まなこ）が付いている。

「八つぁんかい？　相も変わらず、騒々しい男だねえ」。ひょいと障子の横からご隠居が顔を出した。白いものが混ざった髪の毛がだいぶ額から後退しているが、「ご隠居」といわれるほど老けてはいない。実は、まだ還暦前なのである。

「てえへんなんですがね、まずは、おめでとうございます」。勝手知ったる他人の家、草履を脱いでずかずかと上がり込んで八つぁんが言った。

「おめでとうございます？」

「えー、正月の挨拶をしてなかったもんで」

「松の内はとっくに過ぎたし、もう大寒じゃないか。そういえば、この間は年始の挨拶などそっちのけで大酒をかっくらってたな。ただ酒なのをいいことに、うちの酒を全部呑み干しちゃって」

「いや、あれは俺じゃねえです。うわばみの熊ね、あいつがいけねえんですよ」

「うわばみの熊と、がぶ呑みの八の二人だろ」

「熊はともかく、こちとらはそんな記憶は……」

「当たり前だ、前後不覚だったからな。まあ、それはもういい。で、その大変っていうのはいつものあれか？」。ご隠居が八つぁんのほうをジロリとにらむ。

「ご隠居、変な目で見ないでくださいよ。ともかく大変なんですから」

「このあいだの大変は神田明神で平将門の幽霊が出たとかで、うちの酒を呑んでったな」

「そ、そうでしたっけ？」

「こんどは石川五右衛門が名古屋の金のしゃちほこでも盗んだか？」

「め、滅相もねえ、そんなとんでもねえ昔のことじゃないんで」

「どうせどっかのフェイク・ニュースを拝借してきて、またぞろただ酒を呑もうって魂胆だろう」
「フェ、フェ？」
「嘘っぱちのニュースってことだ」
「嘘っぱちなんてとんでもねえ。ホントに大変なんですよ。熊の仕事仲間の松ってやつがモガキにやられちゃって……」
「モガキって、あのあくどい強盗か？　裏道でいきなりぶん殴って……」
「二人組のモガキに襲われて、それでもって無法松は重体らしいんでさあ」
「無法松？」
「ほら映画であるでしょ、三船敏郎が祭りで太鼓叩くやつ」
「ああ『無法松の一生』ね」
「そうそう、車引きの松が後家さんに片思いして…」
「ほう、八もけっこう知ってるね」
「へん、ご隠居より若いですからね、バッチリおぼえてまさあ」
「悪かったな、ボケ老人で」
「いやだなあ、ご隠居、そんなふうにとらないでくださいよ。こちとら、もうずっと聡明なご隠居にお世話になってきたんですから」。ここで八つぁんがピシッと背筋を伸ばす恰好をした。
「まあ、いい。しかし、最後は雪の中で死んで、ちょっと哀しい映画だった……」
「松も『俺の乱れ太鼓は九州・小倉の筋だからな』って言ってたけどさ、ケタオチもいいところ。やつのは乱れ太鼓じゃなくて、ひでえバラバラ太鼓よ。映画の中の無法松と似てるのは喧嘩好きってとこぐらい……」

2

ここは、泪橋の角にある立ち呑み屋「世界」。山谷でチューハイの売上が一、二を争うといわれる。ということは、日本でもベストテンは堅い？
店内は仕事を終えたのか、あるいは仕事にあぶれたのか、そんな日雇いの労働者がいっぱいでガヤガヤとしている。チューハイのジョッキを片手にした八つぁんたち数人が何か大声で話し込んでいる。まあ、議論というより、どなり合っているといったほうがいいかもしれないが、すこし深刻そうでもある。
「熊、無法松は大丈夫なのか？」と八つぁん。話を振られた熊と呼ばれた男のほうをみんなが見た。やや太り気味とはいえ、どっしりとした体は肉体労働をずっと続けてきたことを物語っていた。顔一面の無精ひげはまさに熊のイメージにぴったりだが、ただその動きは時に俊敏なヒグマなどのそれではなく、のっそりとしたパンダを思わせた。着た切りスズメで一張羅のヨレヨレのうわっぱりは、もう元の色が黒なのか紺なのかわからない。

「それがまずいんだよ。まだ意識がねえみたいでかなりヤバイのさあ」
「てえと、もうあの下手くそなあいつの太鼓もきけねえのか。去年の夏祭りで見納め、聞き納めか」
「そうよなあ、無法松なんて気取ってたけど、ひどかったねえ。あいつが太鼓を叩くと盆踊りもだいなしだあ。ドンツク、ドンツク、まるでお経だよ」と坊主頭にねじり鉢巻きの男が合いの手を入れる。
「モガキにやられた『無法松の一生』なんて、なんか寂しいねえ。ナンマイダ、ナンマイダ」と言いながら、なぜか十字を切るしぐさをする八つぁん。
「ちょっとまった、八つぁん。縁起でもねえ、松はまだ死んじゃいねえよ。でもなあ、ポンコツになった体じゃ、もう日雇いなんてできねえな。どうやってこれから食ってくんだ？」
「しかも担ぎ込まれたとこがまずかったんだ。ピンピンしてるやつも薬漬けにしてアウトにちゃうっていう、ケタオチのあの病院じゃあなあ。オヤジ、チューハイお代わり！」。豆絞りの手拭いを首に巻いた男がジョッキを高く持ち上げた。薄汚れたジャンパーの下から派手な赤シャツが見える。
「そんなにひでえのか？」。医者嫌いの八つぁんには病院は無縁だ。
「山谷（やま）のやつなんか、長く置いといても儲からんからさっさと死んでもらったほうがいいのさ」
「助かるもんも、死んじゃうのか？」と八つぁん。
「あそこに入院するくらいならアオカンしてたほうがましよ」と赤シャツ男。
「ちげえねえ。ここらはみんなの立小便で消毒はバッチリだもんな」と坊主頭が言った。
「なら、俺もそいつのもとを補給するか。オヤジ、ここにもチューハイ、一丁！」と八つぁんが大声を上げた。
※アオカン＝山谷では野宿のこと。「青空簡易宿泊所」の略という説や寒空の下で寝るから「青寒」という説などがある。

数日後の熊さんと赤シャツ男の会話。場所は相も変わらずの立ち呑み屋「世界」だ。赤シャツが持ったチューハイのジョッキがゆらゆら揺れている。かなり酩酊している。
「二人組に襲われたっていうけど、無法松は腕力を自慢してたぞ。攻撃はこうだ、ディフェンスはああだ、と身振り手振りをまじえてしゃべってたもんな」
「けっこう酔っぱらってて、いきなり棒かなんかで殴られたらしいんだ。でも変なんだよ。その現場を見た仲間が『モガキにやられてるぞ！』って大声を出したこともあるけど、二人組は金もとらずに一目散に逃げちゃった。まあ無法松のポケットの中には数千円くらいしかなかったんだけどね。でもあいつが倒れて気を失ってから、しつこく何回も殴りつけていたらしいんだ。ちょっとおかしいんだ、ありゃただの金が目当てとは思えねえよ」と熊さん。
「ところで、その二人組のモガキはつかまったのか？」
「ぜーんぜん。つかまるわけねえだろう。マンモス交番のポリなんか、日雇いの一人、二人

死のうが、まるで気にしやしないさ。いい加減な捜査でお茶を濁すくらいだろう。その素振りさえみせねえこともあるしな」
「いつも、そうだ」。赤シャツ男が持ったジョッキをドンとカウンターに置いた。
「池谷荘の組合には報告しといたけどな。あっ、そうそう。俺が組合の人と話してたら、そこにいた男が興味をもってね。ヒガシと名乗って名刺をくれたんだ。ヒガシ探偵事務所だって。組合と同じ二階の向かいに間借りしてる探偵事務所の人なんだな。たまたま組合事務所でお茶を飲んでおしゃべりをしてたそうだよ。小さな探偵事務所なんだけどね、一階の組合の看板の横に、名刺を大きくした紙が貼ってあるよ」
「この山谷に探偵事務所があるなんて知らなかったなあ。でもここで商売になるのかねえ」
「さあ？　けっこう濃い面がまえだったなあ。出来立てのほやほやらしいよ」

ヒガシ探偵の住居兼用の小さな事務所は池谷荘の二階にある。この二階には二部屋あるのだが、一方は、世間でいうところの過激な日雇いの労働組合が事務所をかまえている。ケタオチやタコ部屋まがいの飯場、そして暴力手配師などのヤクザとしばしば対峙していた。それだけではなくて、争議に介入してくる警察もからんで常にごたごたしているので、誰も好き好んで借りるものはなくて、ずっと空き室となっていた。
ある日、ヒガシが「大利根」で一人呑んでいた。そこに組合のオカさんがこれまた一人でふらりと入ってきた。ヒガシとオカさんは以前、日雇い現場で二、三度一緒に仕事をしたことがあった。
「大利根」は地下鉄の南千住駅南口を出たすぐ前のところにある呑み屋だ。「世界」やいろは会商店街にある「野田屋」のような立ち呑みではない。ただ普通の居酒屋とはちょっと違って現金をまずチケットに換えて、それで酒やツマミ、料理を頼む。イギリスのパブやアメリカ映画に出てくるバーのシステムの寄せ場版と言えなくもない。前払い、明朗会計なのである。まず店に入って席に座ると、女の人がやって来る。多くがアジア系のようで、その彼女たちからチケットを買わなければならない。その売上げの中からの何割かの報酬をもらうシステムらしい。勘違いされては困るのだが、彼女たちはバーやキャバレーのホステスとは違って、いたって健全、なにせ白いかっぽう着のようなうわっぱりを着た店員風なのだから。
「やあ」「どうも」などの挨拶のあと、小一時間がすぎてみれば、「ビールだあ！」「酒をもう一丁！」「ここの生ものはすすめられないが、とりあえずてんぷらでも食いねえ」となっていた。
「安い部屋をさがしているんだ」。ひょいと飛びだしたヒガシの言葉に、オカさんが返した。
「あるある、ちょっとうるさいこともあるけどな、とびきり格安だ。それに大家もなかなかいい人だよ」となって一気に決定。そうしてヒガシ探偵事務所の創立となったのである。それがちょうど三か月前のことだった。
ヒガシは以前からときどき家出人の捜索などを頼まれていたのだが、ふだんは日雇いを

している。二股稼業の探偵といえば聞こえがいいが、本業は日雇い、副業が探偵稼業ということだ。非常勤の探偵さんなのである。

彼の丸い顔には濃い眉、ギョロっとした目、やや広がった鼻が勝手におのれを主張するように散らばっていた。時おりの鋭い眼つきは探偵さんを感じさせることもあるが、やっぱり日雇いのおっさんというほうがぴったりなのだった。

夏が終わり、秋のはじめになっていた。日が短くなってきたが、まだ日暮れには時間があった。額に汗を滲ませた八つぁんと熊さんが、ご隠居の家の玄関前を行ったり来たりしている。すると何か意を決したのか、ふっと二人して姿を消した。だが、しばらくすると再び戻ってきた。手にはそれぞれチューハイのロング缶を持っていた。二人は道端にしゃがみこんでぼそぼそと話し始めた。いつもは聞き方の熊さんがもっぱらしゃべっている。

「無法松が退院したぜ。まだ、治っちゃいねえけどさ。日雇いなんか置いてたって、病院としてはもうからんみたいだし」

「ケタオチ病院じゃ、しょうがねえさ。地獄の底から舞い戻ったか。でもまあ、とにかくよかったよ。で、今どうしてる？　日雇いなんて無理だろ」

「組合の人が頑張ってくれて、ほら生活保護っていうのかい、それを取ってくれて。今は何とかアパートに落ち着いたみたいだよ。でもなあ、頭のほうが戻ってねえんだ。昔のことは覚えているけど、モガキにやられた時のことははっきり覚えてねえんだ。なんせ、しこたま殴られたみたいだし。モガキに十万円取られたとか、言っててね。長期の仕事帰りでもねえのに、そんな大金もってるはずがねえ。せいぜい五千円くらいだろ？　ただ……」

「ただ？」

「白手帳がないんだよ。白手帳を取られたって言うんだな。半ボケだから、うのみにゃできんけれど、実際、松の白手帳が見当たらないんだよ」※白手帳…日雇労働被保険者手帳

「どっかに落としたんじゃねえのか？　そんなもん取ったってモガキにとっちゃ、一銭の得にならんだろ？」

「そうだよな。でも、八つぁん、その話をヒガシ探偵にしたら、ヒガシさんはけっこう興味津々だったぜ」

「ふーん」

「あっそうだ。そのヒガシ探偵だけどね、昔はなんと刑事やってたんだってよ。この間、『野田屋』で呑んでたら、みんながヒガシ探偵事務所のことで盛り上がってたんだ。そしたら一人が『あいつは昔はポリだったんだ、俺と似たようなもんさ』と言ったんだ。『お前は自衛隊の出だろ』『だから似たようなもんじゃねえか』『似てねえよ』『警官から日雇いになっちゃったんだから同じよ』。まあ、そんなやりとりがあったのよ」

「ほんとかよ、ガセじゃねえのか」

「それが道端で会ったので、ちょっと聞いてみたのよ。『ヒガシさんは元はポリ、いや警察の方だったんですか』と。そうしたら驚いた顔をして、『まあ……ねえ』とかなんとか言葉

を濁しちゃったけど。それで、『なんで、あっちの人がこっちの人になっちゃったんですか』って聞いたら、『あっちとかこっちとか、なんか幽霊みたいだな』って言って笑ってた」
「それで？」
「それでって？　それ以上聞くのもなんだから、おしまいよ」
「しかし、まかり間違えばマンモス交番のポリなんかやってて、こちとらにひでえことしてたかもな」
「それがいやだから、辞めてまっとうな日雇いになったんじゃねえの？」
「悪徳十手持ちを嫌って木枯し紋次郎になったわけか。残念なことに中村主水みてえな『必殺仕置人』になれなくて渡世人に転身したんだな」
「八つぁん、日雇いは渡世人かよ」
「日雇い稼業はまっとうな渡世人よ」
　その時、玄関の引き戸がガラリと開いた。「こら、八と熊、外でぐちゃぐちゃとうるさいぞ、近所迷惑になるから中に入れ！」というご隠居の声が聞こえた。
「いやあ、中に入るとご迷惑じゃないかと」。熊さんが神妙な声を出した。
「残念だな、今日は迷惑がかかるほど酒はないよ」
「ご隠居、そんなつもりじゃねえんですよ。今日は経験豊富なご隠居のお知恵をお借りしたいと思いまして……」と言いながら、八つぁんはどんどん家の中に入っていく。熊さんももみ手をしながらそれに続いた。

「ところで、熊さん、無法松さんの様子はどうかね」
「あんまりよくないねえ。体もそうだけれど、まだ頭の中がモヤモヤしてるみたいで。でも、ときどきしっかりしたことを言うんだな。この間も自分の田舎は東北だって。てっきり九州の出かと思ってたのに。だって、あいつは小倉の乱れ太鼓なんて日頃から言ってたからねえ。それが本当は東北だったんだな」
「山谷の仲間にはいろいろ事情があるだろうから」とご隠居。
「組合の人も秋田か青森あたりの東北だって言ってたよ。ほら生活保護ってやつを取ったときに松がぼそっとしゃべったそうだ」
「ふーん、東北ねえ。それってこの事件を解くカギになることは……ねえか」。八つぁんが首をかしげた。
「しかし、ここの警察はまるでやる気ないときてるし、わしと、八つぁん、熊さんの三人でこの事件を解決するにゃ荷が重すぎるぞ」
「ほら三人寄れば何とかって言うじゃないですか」
「三人寄れば文殊の知恵ねえ」。ご隠居が八つぁんの顔をまじまじと見た。
「熊ははっきり言ってまるで頼りになりませんよ。シャーロックホームズや明智小五郎がいりゃあ、一発で解決しちゃうんだろうけど、でもそこは神田大明神、ご隠居大明神の頭でカバーしてね」

「頼りなくて悪かったね」と不満そうな熊さん。
「話を聞くところでは、良さそうな探偵さんがいるそうじゃないか？」
「ヒガシ探偵事務所というのが組合事務所の向かいにできまして。だけどヒガシさんは行動派みたいで、名探偵っていうふうには見えないなあ」と八つぁんが言った。
「ヒガシ探偵は行動派か」
「ええ、ですからここは頭脳派のご隠居のお出ましってわけで。人を揃えればいいってわけじゃねえでしょ。バランスですよねえ。まわりを見渡しても司令塔がいねえんですよ。そこは年の功のご隠居が……」
「さっきからいやに持ち上げるな。なんか魂胆があるのか？」
「いやだなあ、それに作戦会議をするったって、ここは便利だし広いしねえ。ヒガシさんの事務所は狭い、散らかってる、しかも前の組合事務所は騒々しいときてますから」
「八、お前の魂胆は見通しなんだよ。これだろう」。ご隠居が片手を口に持っていって酒を呑むしぐさをした。
「魂胆なんて滅相もねえ。友だちの無念を思うアツーい気持ちなんですから」

3

タカハシユウコは回向院の高橋お伝の墓の前に立っていた。「ふーっ」とひとつため息が出た。姓が同じというのもなんかの因縁だろうか。このお伝の墓の前に立つのは二度目だ。いつもの黒いジーンズのパンツとジャケットの上下、そしてスニーカー、髪をひっ詰めにした小柄で細味の姿恰好から少年を思わせた。くりっとした眼と丸みのある顔つきは実際の年齢よりも若く見せた。ただ、ジャケットの内から見えるセーターの紅葉のような朱色は、赤や緑や青などの鮮やかな色とは無縁の、脱色した紺や黒、濁った黄色やくすんだ灰色が支配する男ばかりの世界では否が応でも目立つのだった。

もう五、六年前になるだろうか、何人かでこの山谷に来たことがあった。案内役だった人が回向院に葬られている、吉田松陰や橋本左内、そして鼠小僧、高橋お伝などについて簡単に説明をしてくれた。鼠小僧が「実在の人物」だったというのはちょっと驚きだった。吉田松陰や橋本左内についての話はほとんど覚えていないが、「毒婦」といわれた高橋お伝については頭に残っている。

「明治の初めに男を一人殺して斬首刑にされた女」そして「女に対する斬首刑は高橋お伝が最後のほうだった」など、女性に対する残酷な斬首刑といったショッキングな事実もあったが、それだけではない。むしろ、その後の戯作者や歌舞伎などによって稀代の悪女として仕立て上げられていったことに釈然としない思いが残った。売らんかなの、あること無いことをごちゃまぜにして脚色された、それも女への偏見としか思えない悪意ある描き方――これは今も変わっていない。

タカハシは大手とはいえない、中堅のC新聞社の記者をしている。経験は五年ほど、ベテ

ランとはいえないが、新米でもない。徐々に増えてはいるが、まだまだ少数派の女性記者である。お伝の事例を待つまでもなく、彼女自身の経験からいっても時に理にかなわぬことが降りかかってくる。

年末が近づくと、それまでまるで無関心だった山谷や横浜の寿町などについての取材記事が新聞の紙面を賑わすようになる。あぶれた日雇い労働者や路上の野宿者の光景が定番なのだが、その多くは上っ面をなでただけの、読者の同情心にもたれかかったような記事だった。

年の瀬にはまだ間があったが、タカハシ記者は山谷の取材に来ていた。だが、意気込んで来たものの、納得できるほどの記事が書けるかどうか。さあ、どうするか。まず山谷労働センターや玉姫職安に行ってみた。ただ職員から聞かされたのは、これまでにマスコミが報じたような、当たり障りのない話だった。警察ではろくな話が聞けないだろうと思って行くのはやめた。職安のあとに、山谷をぶらぶらすることにした。あぶれたのだろうか、手拭い鉢巻の労働者が所在なげにふらふら歩いている。路上で酒盛りしている者、その隣では酔っぱらったのか、寝ている者も。

何かの本で読んだ寄せ場のある活動家の言葉がふっと浮かんだ。

「なぜ寄せ場の労働者はアル中になるほど浴びるようにして酒を呑むのか？」という問いに彼は言った。「脳を麻痺させなければ生きていけない、脳の爆発を抑えるために飲む――その結果、労働者の武器である肉体は収奪されていく」

「脳の爆発？」

どこかで聞いたような……その言葉がタカハシにある映画のシーンを思い出させた。

「わたしオバンバ、あなたの脳味噌を食べさせて！」。それは、とぼけた看板がかかった映画『バタリアン』だった。

一時間半。コメディーの範疇をとび超えたくだらなさ。でも、B級ホラー映画ならではの真骨頂があった。台にしばりつけられた上半身しかない老女ゾンビのオバンバ（すごい日本語訳だ）。

「脳味噌を食べると死んでる苦痛が和らぐの」

ゾンビが脳味噌を求めるのと、肉体労働者が浴びるように酒を呑むのも同じ？

酒の呑みすぎは体に悪い。でも、わかっちゃいるけどやめられない。呑まないとバカ真面目、ある程度は大丈夫だけど、それが一つ限界を越えちゃうと突然おかしくなる。まるで漫画『じゃりん子チエ』に出てくるお好み焼き屋のオッちゃんだ。酒一升超えると人が変わって、ほとんど無敵のチエの父親テツも逃げ出した。

自動販売機で買ったワンカップをキューっと一気に呑んじゃう。酒を呑むっていうより水を飲むって感じ。呑むなって言ったって無理なんだ。酒を呑んだから酔っ払ったというんじゃなくて、酔っ払うために呑む。それで、死ぬか、体をこわすか、どっちかとなる。

脳がアルコールを求めるということだろうか？　そういえば、ゾンビがよろよろ歩く姿は酔った日雇い労働者を連想させてしまう。

※閑話休題、映画『バタリアン』について。原題はThe Return of the Living Dead。一九八五年公開のアメリカのゾンビ映画。一九六八年公開のゾンビ映画の金字塔『ナイト・オブ・ザ・リビングデッド』へのオマージュがコメディータッチで随所に盛り込まれている。このバタリアンシリーズは好評を博して全部で五本つくられた（第四作と五作はウクライナとルーマニアで製作）。ただ、たいていのゾンビは頭を撃ったり首を切り落としたりすればやっつけられるのだが、このバタリアンの生きる屍（リビングデッド）は死なない。反則だ。

ゾンビ映画はその後もB級・C級を問わずどんどんつくられた。『ゾンビ革命フアン・オブ・ザ・デッド』はキューバ初のゾンビ映画として二〇一二年に製作されたし、『処刑山　ナチゾンビVSソビエトゾンビ』（二〇一四年ノルウェー・アイスランド合作、『処刑山　デッド卍スノウ』の続編）なんてのもある。あのジム・ジャームッシュ監督も二〇一九年に『デッド・ドント・ダイ』をつくった。

タカハシはひょいと路上に座り込んでいる三人の労働者の中に入っていった。そして腰を下ろして彼らに話しかけた。少しびっくりしていた労働者だったが、それは最初だけだった。酔った彼らは女性を歓迎してくれたし、意外と饒舌だった。いまより元気でバリバリ仕事をしていたことや、ギャンブルで大儲けをした嘘か本当かわからない自慢話をとうとうと話し続けたりした。湿っぽい話題や苦労話は決してしなかった。「生まれは東北だよ」「九州の炭坑で働いていた」というようなことはぽろっとしゃべるが、それ以上の身の上には触れないように話を他のことに振ったりした。それも当然だ、労働者の仲間にだって話さないことをまったくの部外者である新聞記者に話すわけがないんだ。

ただ、その中の一人が話したことは記者のタカハシにとっては刺激的な内容だった。無法松が襲われた二人組によるモガキ事件だった。

「モガキって普通は金目当ての強盗なんだけど、そうじゃなくてさ。初めから半殺しが狙いにしか思えねえ。もしかしたら殺すのが目的だったかもしれねえよ」

「そんな大変なことがあったんですか。で、警察は？」

「日雇いの事件なんて動きはしないよ」と別の男がぼそっと言った。

「詳しいことは池谷荘の労働組合に行って聞いてみな」

「こんにちは、私、C新聞の者ですが、少しお話を聞かせてもらえませんか？」。タカハシが池谷荘の狭い階段を上って、二階の組合事務所のドアの前で声を出した。組合の者が一人出てきた。

「女の新聞屋さんとは珍しいね。山谷には女性の写真家は来てるけどね。行政や警察の嘘っぱちの言い分でなくて事実をそのまま伝えてくれれば取材は歓迎だよ」

「行政には話は聞きましたが、警察には行ってません。どうせたいした話は聞けないだろうと思ってましたから」

「ああ、それはいい考えだね」

取材が一時間を過ぎたところで、タカハシはモガキ事件について聞いてみた。
「その件は向かいのヒガシ探偵事務所に聞いてみな。俺たちより詳しいから。この事件にえらく熱心なんだ。ヒガシさんはね、いまでこそ日雇い兼探偵さんをやってるけど、昔は警官だったんだ。俺の嫌いな山谷のポリと違ってまっとうなね」
「探偵事務所？　へえー、山谷に探偵事務所があるんですかあ」。不思議そうな面持ちでタカハシは首をかしげた。

「せっかくの女性の来客なのにこんな汚い事務所では何だから、ちょっと場所を移しましょうか」とヒガシが言った。そして徒歩五分、やって来たのは南千住駅の南口にある「大利根」。ヒガシ探偵のいつものお気に入りの呑み屋である。二人は空いている席に座った。
「えーと、タカハシさんだったね、何にします？」
「取材の時はしらふなんですけれど」
「この山谷では通用しないよ。いけるんでしょ」
「まあ、じゃあビールをお願いします」
「そうねえ、ここのチューハイはとびっきりきついからビールが無難だな。でも、俺はチューハイ、おねえさん、ビールとチューハイ！」。ヒガシが大声をあげた。
初めのうちは無法松モガキ事件について、ぼちぼちと聞いたり話したりしていたが、それも一時間が過ぎてアルコールのめぐりがよくなってくると、ヒガシ探偵の話はしばしば脱線していった。
「ヒガシさんは昔、警官だったそうですね」
「困っちゃうな、秘密だったのに何でか最近知られちゃってね。日雇いは警官が嫌いだから商売に差しつかえがあるんだなあ。ただ実際、俺も日雇い稼業を始めてからこの寄せ場での警官のひどいやり方を目にしたり話を聞いたりしてるから」
「どんな？」
「交番に連れ込まれて茶巾にされて蹴とばされたり。茶巾ってわかる？」
「ええ、女の子のスカートをまくり上げて頭のあたりで縛っていじめるあれですか？」
「そう、ここでは男だけどね、上着をまくって自由を利かなくするんだな。あと大阪の釜ヶ崎で聞いたんでは毛布をかぶされて数人でボコボコにされたり」
「暴力団みたいですね」
「それと変わらない奴が実際いるんだよ」
「へえー、ひどい話ですねえ」
「今度のモガキ事件も裏で警察が絡んでるんではとも思えてくるよ」
「えっ、本当ですか？　警察権力の犯罪じゃないですか」。タカハシの目が鋭く光った。
「映画や小説だったら、そんなこともありうるかなっていう、まあ、いまのは半分冗談だけれど」
「……」。ちょっとがっかりした顔のタカハシ。

「しかしなあ、昔ながらの強引なやり方で自白をさせて一丁上がりじゃあ、冤罪だってなくならないはずさあ」
「で、警察をやめた？」
「肌が合わなかったというのもあったけどね。知ってるかい。警察っていうのは典型的な階級組織でね。出世コースは国家公務員上級試験に合格した一握りのキャリア組だけに用意されてるんだ。他のノンキャリア組はっていうと、フーフー言いながら次々と昇進試験に合格しなけりゃいけない。それと手柄もあげないと。だから、交通違反切符をせっせと切ったり、職務質問をどんどんして実績を積み重ねようとする。で、なかには無理やりってことも……あっ、こんなの面白くない？」
「そんなことないです。あと痴漢犯罪をでっち上げたり？」
「黒澤明監督の『野良犬』って映画で、主人公の刑事が拳銃を盗まれちゃうんだけれど、拳銃どころか、警察手帳を落としたって大変だから」
「いろいろプレッシャーがきついんですね。それで、警官がいやになった？」
「まあ、ちょっと個人的なこともあってな」
「それって、女性問題？　違うって顔してるからやっぱりギャンブルね、借金でしょう」
「あんた、話を持っていくのうまいねえ。警察の尋問顔負けだよ。新聞記者より探偵に向いてんじゃないの。あっそうだ。タカハシさんは女性だから興味があるかもしれないな。こんな話があるんだ」。苦笑いをしながらヒガシ探偵がまた話し始めた。
――横浜にも寿町という寄せ場があるのは知ってるよね。そこでホームレスの支援をしている人の話なんだ。通路で野宿している者にとって一番の恐怖は何だと思う？　それは靴音だって言うんだな。「コツコツコツ」。その響く音が迫ってきて蹴とばしたり暴行したりすることがあるからなんだよ。寝ている者にとって暴力の予兆だとしたらこれは怖い。それから、ホームレスは男が圧倒的に多いけれど、中には女の人もいる。年をとって認知症になる人は一定程度いるけれど、女性のホームレスがなる率は高いそうだ。これは統計をとったわけじゃなくて、その支援者が経験から感じたことだそうだけど。やはり女性のほうが外部からの暴力に対する恐怖が強いから、恐怖を忘れるための一種の防御的な対応じゃないかな、と話していた。
「なんか哀しいですね。その支援の人の話を聞きたいです」
二人はもう相当に酔っぱらっていた。そこへ熊さんと八つぁんが店にどかどかと入って来た。
「おや、熊さん、八つぁんも一緒かい」とヒガシ探偵。熊さんとヒガシ探偵が出くわすのはこれで四度目だった。つい先だっては、無法松モガキ事件について情報交換という名目でこの「大利根」でしこたま呑んだばかりだった。途中から八つぁんもそこに合流していた。
「ヒガシさん、もうだいぶできあがってますねえ。しかも女性と二人とはにくいねえ」と八つぁん。
「そ、そんなんじゃないですよ」と照れるヒガシ探偵。

「いやいや、どうしてどうして。お初にお目にかかります。旅は道連れと言いますからお邪魔しちゃおうかな」というが早いか、ちゃっかりタカハシの隣に座り込んだ。

ヒガシ巡査部長は被疑者の尋問に立ち会っていた。それはほとんど休憩なしで十時間を超えていた。ヒガシと上司のF警部補は一服しに、その密室を出た。

「ヒガシ君、もうちょっと積極的にやってくれよ。俺が一人で追及したり、なだめたりするのは無理なんだからさあ。ヒガシ君がガツンとやって、こっちが優しく出ればもうちょっとで奴は落ちるよ」

とはいえ、取り調べはもっぱらそのF警部補のサディスティックとも思えるきつい言葉によって主導されていた。ヒガシはこの密室での長時間による尋問に嫌気がさしていた。連日の取り調べで被疑者は疲れ果てていた。しかも、事件について訊くというより「親が泣いているぞ」とか「意地を張って否認してるお前なんか、もうみんな見放してるんだよ」といった言葉でネチネチと攻め続ける。こうして、精神的に追いつめられていった被疑者は、半ば訳が分からないうちに「自供」をさせられる。

――こんなんでいいのか？　戦前戦中の肉体的なひどい暴力こそないが、まるで拷問じゃないか。「指の間に鉛筆を挟んで、おもい切りねじあげる。指の爪の下のところにつま楊枝や畳針を刺し込む」。どこかで読んだ特高警察が行った拷問の光景がヒガシの脳裏に浮かんだ。こんなことをやってると、神経もマヒしてしまって、平気で俺も同じようなことをする人間になってしまう。ヒガシは針を持ち出し、試しに爪の下をちょっと刺してみた。プス。

「いてえ」

それから数日後、ヒガシは警察に辞表を出した。無職になった。失業保険もすぐになくなった。さて、どうして食っていこう。

4

外は強い風が吹いていた。葉をいっぱい抱えた一本の常緑樹全体が大きく揺れていて、いまにも動き始めるかのようだった。上下そして左右にうねる葉はまるで荒波のようで前途多難な航海を連想させた。

「うーっ、寒い！　ご隠居、荒れ模様ですよ。こりゃ、先が思いやられますねえ」と言いながら八つぁんが玄関の引き戸をピシャリと閉めた。

「おいおい、八つぁん、あんまり強く閉めないでくれよ。年代物なんだから。しかしまあ、風雲急を告げるってやつか」

八つぁんのあと、熊さん、ヒガシ探偵、それにオブザーバーのタカハシユウコ記者がぞろぞろと集まって来た。「無法松君の支援およびモガキの暴力を許さない会」の初会合がこれから始まろうとしていた。

熊さんがぼそぼそと話し始めた。

「まず松の経過報告から。相変わらずで、なんとか生きてるけど、よくなってねえなあ。あれだけ好きだった酒もあんまり呑まないし。この間も缶チューハイを持って見舞いに行ったんですけどね、こっちが三本呑む間にまだ半分くらいしか空けてねえんだ」
「お前の呑み方がはえんだよ」
「人のことは言えんぞ、八つぁん。お前たちときたら酒を味わって呑むことを知らんからな」とご隠居。
「耳が痛いですねえ」とヒガシ探偵が言った。
「ところで、酒なんか呑まして大丈夫なのかね。体に悪かないのかい？」
「いやね、好きだった酒でも呑めば頭が復活するんじゃないかと。なにせあいつはしらふだって酔っぱらってるみたいだったし、逆にアルコールが入ってたほうがまともだったんで。ほとんどアル中だったんだから」
「どこもかしこも、アルチュール・ランボウかい？」とご隠居がつぶやいた。「まあ、酒の話はこれくらいにして、他になんか報告することはないかな、熊さん」
「そうですねえ、仲間内では松は誰かと間違われてやられたんじゃないかという、そんな声が多くて」
「ヤクザの縄張り争いなんかのとばっちりですか？」。タカハシ記者が遠慮がちに言った。
「でもさあ、普通ヤクザのえらい奴はあんな汚い恰好じゃなくて、ぱりっとしてるよな。だからって、使いっぱしりのヤクザの、そんな奴をわざわざ付け狙うわけねえし」と八つぁん。
「そういったヤクザ抗争の線はないだろうけれど、金が絡んでくりゃあヤクザは動くよ」。ヒガシ探偵のその声を聞いてタカハシ記者がうなずいた。
「少年たちの襲撃ってのはないかね。横浜の寿町であったみたいな」と今度はご隠居が言った。
「どうしたらあんなひどいことができるんですかね。無抵抗なホームレスの人を選んで襲ってる」とタカハシ。
「差別なんて言葉ひと言では説明できない、もっと根が深く執拗なものを感じるよ。汚い、臭い、怠け者のホームレスなんて生きてく資格がないんだという、もうほとんど断罪する気持なのかねえ」。珍しく怒気を含んだご隠居の言葉だった。
「組合のオカさんはこんなことを言ってましたよ。『彼らは自分たちの未来を殺してるんだ。彼らだって、目の前には明るい未来のルートが広がっているわけじゃない。厳しい現実が待っている。でも可能性は残されているのに、アオカン者を襲撃することよって自分の未来をつぶしている。実際、ヤクザを構成してるのは下層の出身者が多いんだ。そのヤクザはこの矛盾だらけの世の中で享楽を求めざるをえない下層の者から搾取し続けている』って」とヒガシが言葉をつないだ。
「えーと、なんか小難しい話になっちゃったけれど、その線はないよなあ」。八つぁんが熊さんのほうを見た。
「事件の目撃者によると、犯人は若い奴じゃなくて、モガキ風だったって」

「さっき熊さんは、誰かと間違われたんじゃないかっていう仲間の声を報告してたけど、じゃあ、なんで彼の白手帳がないんだ？　襲ったモガキが奪ってったというのが普通考えられるんじゃないのかね。つまり無法松さんの名前を確かめたいためにさ」。ご隠居がなぜか右手で薄くなった髪の毛をかき分ける仕草をした。

「間違われたのか、それともやっぱり目当ては無法松さんだったのか。それはまだはっきりしないけれど、ご隠居の言うように考えたほうが理にかなっていますね。つまり金目当てのあてずっぽうのモガキの仕業じゃないと」。ヒガシ探偵がぼそっと言った。

「裏があるんですね。そうですよね」。タカハシ記者も同調した。その場がちょっぴり間が空いたあと、熊さんが口を開いた。

「それから、えーと、あとこれは関係あるかどうかはともかくとして、松の趣味といやあ、下手くその太鼓叩きだけど、他にもあるんだよ。山歩き。田舎育ちだからかな、山が好きだったみたい。赤シャツが言うには最近では太鼓じゃなくてこっちのほうだって。おまけに何が面白いのか山の中で双眼鏡でもって、鳥を見てたらしい。何て言ったかな、えーと、バード……」

「ウオッチングね」とタカハシ記者。

「それそれ」

「あのう、さっきのヒガシさんの『金が絡んでくりゃあヤクザは動く』って言葉がひっかかるんだけど」。タカハシ記者が続けた。

「うーん、利権に群がる大資本と、その裏の裏でうごめく反社会勢力、つまりヤクザっていうのが典型的な構図としてあるね」とヒガシ。

「大資本と下層労働者の関係なんていうと、ピンとこないかもしれないが、大手の建設資本のゼネコンと末端の日雇い労働者は垂直的につながってるからなあ」とご隠居。

「利権といえば、原発や公共事業、それにオリンピックなんていうのがありますね」。タカハシがつぶやいた。

「俺たち日雇いがいなけりゃ、ビルの一つも建たないし、ゼネコンだって儲けられねえ」

「その通りよ」とタカハシ記者が同調した。

「というと、この無法松のモガキ事件解決のカギは、ゼネコンとバードウオッチングの謎にあるのかねえ？」

「何を言ってんのかわかんねえよ」と熊さんが八つぁんのほうを見た。

「そんな不思議そうな顔をするなよ。それなら、宇宙から来たエイリアンが電波かなんかでモガキを操って松を襲わせたってえのはどうだ。映画なんかであるだろう。地球を征服するためにやって来たエイリアンがさあ」

「地球征服のために太鼓叩きの日雇いを一人殺すのかね？」と熊さん。

「地球はオーバーだから日本、いや山谷を征服するためかな？」

「それって、山谷の縄張りを支配しようとするヤクザのエイリアンのこと？」。ヒガシ探偵が苦笑いした。あきれ顔のご隠居が言った。

「どうせ八つぁん一流の、そろそろ会議をやめて早く呑もうっていう合図なんだろうよ」
八つぁんが手際よくコップをみんなに配り、ビールを注いで回った。
「これは乾杯用だよ。ビールは高いから、あとはチューハイにするかお湯割りにするかにしてちょうだいよ。では、ご隠居、乾杯の音頭をお願いします」
「八つぁんはこういう段になると急に生き生きするんだからな。では、えー、名前は『無法松君支援の会』でいいのかな」
「それと『モガキの暴力を許さない会』ですかね」とヒガシ探偵。
「長い名前だな、覚えられんよ。とにかく、その会の結成を祝って乾杯！」
「それでは、ゆっくり、じゃんじゃん呑みましょう。ヒガシさん、ご隠居はねえ、夏でもかん酒なんですよ。しかもぬる燗だって。悠長じゃありませんか。こちとらカスカスで生きてる貧乏人とはえらい違いでしょう？」
「酒は味わって呑むもんだぞ。お前たちみたいにがぶ呑みするためのものじゃない。それに燗酒は体と心にいい」
会議は三十分で終了、それから呑み会が延々と三時間続いたのだった。

無法松の趣味は一に酒を呑むこと、二に下手の横好きの太鼓叩き、それに意外なことに山歩きだった。ただ野の花を愛でるという柄ではないと自分でも思っていたから、ただひたすら歩く。ときには紅葉をきれいだなと感じることはあっても、それより滲んでくる汗が心地よかった。とはいえ、その心地よさにも少々マンネリになってくる。
紅葉もそろそろ終わりになる時だった。ピューと風に吹いてきて葉がパラパラと周りに落ちてきた。松は何気なく落ちてくる葉を見上げた。葉はゆっくり落ちてくるが、中にはくるくる旋回しながら落ちてくるのもあって、それが風に舞うとヘリコプターのように少しばかり上昇するのだった。「ふーん」。そんな観察なんて今まではしたことがなかった。すると。
「あれっ？」。向こうのほうで初老の男が双眼鏡で何か遠くを見ていた。
「何か見えるんですか？」と興味を持った松が近寄って聞いた。
「野鳥です。バードウオッチングですよ」
「バードウオッチング？　それって……面白いんですか？」
「ええ」
「木のてっぺんや草むらや水際などで野鳥を見つけるのは、ちょっとオーバーに言えば新しい発見なんです。鳥の生活と、それを包む自然を見ることができるから。朝や夕方、雨上がりに聞こえる鳥の鳴き声に気づいたり、季節の移り変わりが感じられるんですよ。森や林のなかで耳を澄ませ、野鳥の声が聞こえたら、その方向を根気よく見ていると、木の葉や枝のわずかな動きや、その間を動く影を見つけることができます。それを目で追っていると、野鳥の姿がとらえられるようになるんです。それと、この双眼鏡はね、他にもいろいろ使い

道があるんですよ。遠くの景色や星空を見るとか」
「へえ、そうですか？」
無法松の山歩きは次のときから双眼鏡持参となった。最初のうちは双眼鏡で野鳥をつかまえるのは簡単ではなかった。鳴き声のするほうに双眼鏡を向けても姿をとらえられないし、バサッという羽の音がしても、木々や葉に隠れているのか、まったく見えない。だが、初心者も経験を積む。何とか野鳥を見つけられるようになったが、さてその名前がわからない。そこで、無法松は生まれて初めて図書館というところに行ってみた。なぜかボールペンと広告の裏紙を持っていった。図書館の職員に話して探してもらったのが『野鳥図鑑』という本だった。それからは一羽の野鳥を見つけると、その姿が目に焼き付いているうちに、その足で図書館に行き、『野鳥図鑑』を開いた。
そうこうするうちに、オナガ、コゲラ、ツグミ、メジロ、シジュウカラ、ムクドリなどの野鳥の区別がつくようになった。よく見かけるシジュウカラなどは肉眼でもわかるようになった。白いお腹に頭のほうは青や灰色が混ざった色の鳥で、ツーピー、ツッピーといった声で鳴く。こげ茶色と白のまだら模様の羽をしたコゲラは、スズメと同じくらいの大きさで、ギィーという声が独特だ。くちばしがオレンジ色のムクドリも見分けやすい。

ちょうどその頃のこと。山谷の日雇い仲間と、無法松は酒を呑んでいた。
「山歩きはいいぞ、酒なんか呑んでるより何倍もな」
「呑んべえの松からそんなことを聞きたくねえな。それにだ、こちとら毎日ひーこら働いて生きてる者には、酔狂なことに掛ける金はねえよ」と赤シャツ姿の男に言い返された。
「駄目だなあ。俺たち日雇いだって、もうちっと、趣味をもたなけりゃあ」
「趣味？　じゃあ言っちゃうけど、お前の太鼓を聴かされると気分がめげるんだよ」と赤シャツ。
「あのなあ、太鼓じゃないの、バードウオッチングね、野鳥を見てると気分がすーっとするんだよ」
「ヤチョウ？」
「山や野の鳥だよ、鳥。わかるかなあ、山野、サンヤの鳥だよ」
「かっこつけやがって、山谷の鳥っていえば焼き鳥しかねえだろう」
「あーあ、俺はこの『野鳥の会』山谷支部のたった一人の会員かよ」

無法松がぶらぶら歩いていた。もう日はだいぶ高くなっていたが、仕事にあぶれた日雇いはその日することもない。すると、小さな野鳥が十数羽、池の中で羽をバタつかせているのが目に入った。「カラスの行水」という言葉があるから夏ならわかるが、この寒空の下である。ちょっと見れば、空から落ちてきて溺れているのではと見間違いしてしまうが、そんな様子ではなかった。むしろ水浴びを楽しんでいるようでもある。十秒ほど冷たい水の中で動き回っていた鳥たちはパラパラと飛び立った。そうして枯れ木の枝にとまり、そこで羽をプ

ルプルと動かし水を切ったあと、あっという間もなく一団となってどこかに飛び去って行った。「ふーん」。無法松は山で野鳥の観察をするようになってから、風景や身の回りの様子を見定めるようになった。鳥だけではなく、時には空の雲の形をじっと見ていたりもした。

無法松はいまでは通いなれた図書館で『野鳥の生態』という本を探し出し、一時間以上、その本と格闘した。それでわかったことは、鳥の羽にはホコリや寄生虫、それに脂粉といわれる細かい白い粉がつくようで、それを洗い取り除いているということだった。そういえば、と無法松は思い出した。前にも、山の小川で鳩が水浴びというより、羽をやけにバタバタ動かしているのを見たな。そのあとには白いものが流れ出ていた。「あの白いのは何だ？」と不思議な気もしたが、それもすぐに忘れてしまった。あれも白い脂粉だったのか、と納得したのだった。

5

いまは「ご隠居」で通っているが、当たり前のことながら昔はそうではなかった。

戦争が終わったとき、彼は十四歳だった。父親はすでに南方で戦死していたので、それ以降は母親一人で育てられた。敗戦後しばらくは空襲を免れた上野の古い家にすんでいた。現在のアパートはその家と土地を売った金で千住に建てたものだ。一浪して大学に入ったが、母親の期待にそむいて、ご多分にもれず共産党に入党した。しかしその活動もやめ、さらに五年間通った大学を中退してしまった。しばらくぶらぶらしたりアルバイトをしたりの生活を続けていたが、突然、何を思ったのか旅に出た。それは旅というより、日本全国を放浪し続けることだった。放浪し金がなくなると、日雇い、あるいは臨時の工員などをした。そしてまたその地をあとにした。そういったことが八年ほども続いたあと、ある女と出会った。年貢の納め時だと思った。そして千住に戻って一緒に生活することになった。

「ご隠居」と呼ばれるようになったのは、そのつれあいに先立たれ、次いで母親も死に、残されたのは築三十年のアパートと自分だけになったときだった。十八年勤めていた会社をやめて、このとき、長屋の大家の「ご隠居」となった。まだ五十歳の若さだった。

「こちとらはずっと気楽な独り者だけど、ご隠居も一人が長いんでしょ。いまとなっては、えーと、忠臣蔵の大石内蔵助なんでしょうが……」

「大石内蔵助？」

「ほら、歌舞伎なんかで、遅れちゃった……」

「ああ、『遅かりし由良之助』かね」

「そうそう、それそれ。もう『遅かりし』なんでしょうが、再婚なんて気はなかったんですか。聞くところによれば、おかみさんは美人で評判だったそうですねえ」。アルコールが回ったのか、ろれつが怪しくなった八つぁんが言った。

「美人で評判なんてえのは、話半分どころか、三分の一だなあ」

「へえ、そうですかい。ケタオチですか？」
「ケタオチとは言いすぎだぞ。美人だったと、すこしは言えないわけではない」
「そうでしょうねえ。美人薄命といいますから。で、癌かなんかでお亡くなりになった？」
「それは……」。酒が入って赤くなったご隠居の顔がいくぶん翳った。
「あっ、まずいこと言っちゃった？」
「そうじゃないけどね。一生の不覚でな」
「一生の不覚？」
「体調が悪そうだったあいつを置いて寄り合いに行っちゃったんだよ。で、帰ってきたら、ものすごく様態が悪くて救急車を呼んだんだけれど手遅れだった。急性肺炎だった。悪性の風邪をこじらせたんだな。わしが寄り合いに行かなければ命は助かったかもしれない。それに寄り合いって言ったってただの呑み会だったんだ」
「運だなあ。おかみさんも運がなかった。ご隠居、運ていう奴は特上のウナギなんですから」
「なんだい、そりゃ」
「ツイてれば万馬券だって簡単にとれちゃう。駄目ならどん底。運はこの世の中で最強で、神様だってかなわない。噂じゃ神様も運には逆らえないそうですよ」
「面白いことを言うねえ」
「馬鹿ヅキの奴の前では誰もが無力で、だから触らぬ神に祟りなしで、おおもとの神様も運をよけちゃうんだから」
「なるほど、八つぁん大明神の見立てでは運があいつを白状にも見放したってことか？」
「まあ、そうとしか言えねえですよ」
「しかし、八つぁん、運が特上のウナギとすると、神様はそのウナギにも負けるのかい？」
「も、もちろん、そうですよ。昔、『神様、仏様、稲尾様』って言ったでしょ。神様なんてぐっと近いじゃないですか。そこへいくと、特上のウナギは存在は知ってるけど、こちとら、お目にかかったこともねえ」
「西鉄ライオンズのピッチャー稲尾なんて、お前もずいぶん古いねえ。まあ、これはこれで立派な屁理屈だな」。八つぁんによる運と神様問答はここで終わった。
「しかし、おかみさんはやっぱり本当の美人薄命だったんですねえ」
「でもなあ、八つぁん。いまじゃ、あいつの顔を思い出そうとしても、薄い膜がかかっちゃってはっきりせんときがあるんだ」
「ずいぶん薄情じゃありませんか？」
「情が薄いというけれど、この頃思うんだが、それがときを経るということなんだよ。つい昨日のことのようだなんて言い方があるが、違うんだ。といっても、夢の中で不意にあいつが現れることもあって、そういうときに限って鮮明なんだな」
「そんなもんですかねえ。ところで、次いでだからもうひとつ訊いちゃおうかな。ご隠居のこの家は借家ですよねえ」
「そうだけど」

「長屋の大家なのになんで自分の家は借家なんです？」
「もう長く借りてるから自分の家みたいになってるけどねえ。そうだなあ、家を持つなんてのは堕落だと思ってたのがひとつ。それに家持ちじゃあ、一人で放浪することもできやしない。物を持つということと精神の自由を保つということは反比例だから。ホーボーといってな、昔、アメリカ大陸を放浪する人たちがいたんだよ。貨物列車の車掌や制動手の目を盗んで無賃乗車して、鉄道でさまようように旅をしていた。わしはそれにあこがれていたのかもしれない」
「ホーボーを放浪する？」
「ほう、八つぁんも洒落を言うのかい」
「楽しそうだけど、メシを食うのも楽じゃないやっていう、日雇いの立場からすれば贅沢な話よ」
「そう言ってくれるな。ともかく、結婚して会社勤めをしているときも、いずれは旅に出るという気だったんだ。八つぁんや熊さんだって家を持ったら大変だぞ。せっせと毎日仕事をしなけりゃならないし、年がら年中酒をくらうなんてのはまず無理だ」
「インテリの考えてることはなんか小難しいや。いいんだ、こちとらは持ちたくても家なんか持てやしねえから」
「親から譲り受けたものだけれど、いまはアパートを持っているがね。まあ、これはわしのメシのタネだから」

ついこの間のことだった。ご隠居はぼんやりとテレビを見ていた。それはホヤの生態についての科学特集番組だった。
――ホヤは進化的には古い動物で、幼いころは原始的な脳と感覚器官を持っています。それで、食べ物がたくさん流れてくる安全な岩を見つけるために泳ぎ回ります。やっと、その岩が見つかると頭を外側にして自分自身を取り付けます。そうして流れてくる食べ物をつかまえ始めます。ここからが驚きで、泳ぐ必要がなくなると、なんと自分の脳を食べてしまいます。生物学者と神経科学者はその行為を合理的だとしています。脳を動かし続けるには多くのエネルギーが必要です。動かなくなったホヤにとって、エネルギー、つまり食べ物を手に入れるのはかなり困難で、脳のような代謝的に高価な臓器が不要になったら、それを取り除くほうが良いのです。無駄にするのではなく、食べてしまうのです。
ほーっ、ご隠居はこのホヤの大胆な行動、そして知恵に感心してしまった。まてよ、この感覚はどこかで……そうだ、椿の花。冬、隣の家の庭先に咲くたびに思い出すあれだ。
まだ小さかった遠い昔、ポトリと落ちたばかりの椿の花びらを見るときれいだなあ、と思っていた。ところがときが過ぎて、大学生だった頃、誰かが言った。
「椿の花は縁起が悪いとされてたんだ、ほらポトリと落ちるのを見ると首が落ちるって連想するからな」
えっ、と思ったが、知らなかったことが気恥ずかしかったのか、そのときは黙っていた。

ただそのあと、大学の図書館でこっそり調べてみた。
——植物は種を残すために、花を咲かせ、花粉を運んでもらう必要がある。普通は、昆虫の活動が活発な春から夏に花を咲かせるが、椿は冬の寒い時期に、昆虫ではなくて鳥たちに花粉を運んでもらう。なぜなら、昆虫よりも鳥のほうが、より遠くまで花粉を運んでくれるから。ところが、鳥が花びらの隙間から蜜を吸うと交配できなくなってしまう。それで、花びらと雄しべがつながっているという強い花のつくりにして、鳥が正面からしか蜜を吸えないようにした。こうして、花びらが一枚一枚散るのではなく、花がポトリと落ちるようになった。
本にはそんなことが書いてあった。植物の知恵というわけか。しかし、すごいもんだ。用がすんだら花全体を一挙に捨ててしまうという生き物の潔さといったらいいようなものを感じたのだった。
まてよ、欠点だらけの八つぁんや熊さんを日ごろから見慣れているが、彼らにはそういった生き物の知恵や潔さのようなものを持ち合わせているのかもしれない。やる気のない警察が見放して、いまや迷宮入り状態の無法松モガキ事件だって、なんとかなるかもしれんぞ。

ここは立ち呑み屋「世界」。八つぁん、熊さんの酔っぱらいが二人。
「松も一人で大変だなあ。体もあんまりよくなってねえんだろ」
「そうだけど、八つぁん、奴は、ほらナントカ保護で俺たちより老後は明るいんだ」
「毎日安酒ばかり呑んでりゃあ、日雇いに老後はないか。熊、ちったあ体に気をつけろよ」
「八つぁんに、言われたくないね。八つぁんこそ、このままじゃあ、明日はないよ」
「それがなあ、老後、あるんだよ。将来の見通しがな」
「えっ、年金払ってねえだろ、それに一銭だって貯金がないくせに。それともどっかから財産でも転がり込む予定でもあるのかい？」
「ふふふふ、ふだんの行いがいいのかねえ。それよ、ある筋からね。しかも、熊五郎くん、素寒貧な君もちょっぴりお相伴にあずかれるんだよ。その御仁があわれな君を見ていられなくなったってえことで」
「えっ、俺も関係あんの？　で、誰だい？　その御仁っていうのは」
「聞きたい？」
「もったいぶってねえで、さっさと言いなよ」
「では、ジャーン。時は一週間前のことであった。場所はさる大家さんの家、まあたいした家じゃなくて、しかも借家だけどね」
「なーんだ、ご隠居かよ」
「なーんだ、はないだろう。そのご隠居の一大決心なんだから。長々と話していくとここの酒代がかかるから、ズバリ言うぞ」
——八つぁん、お前たちは、このままいけば、日頃の不養生がたたって体はボロボロ、路上で死ぬしかないな。それも因果なんだからしょうがないといえばしょうがない。しかしな

あ、そのときはわしも死んでるだろうから線香の一本もあげられないし、なんかあわれだ。どうせお前たちは年金もなし、貯金もなし、頼る親戚もいないんだろう。わしには身寄りはない。ということで、決めた。わしが死んだら、このアパートを八つぁんと熊さんにあげるよ。ボロアパートだが、こいつがあれば、お前たちも畳の上で死ねるかもしれないからな。

「俺たちのことを毎日毎日よくもまあ飽きもせずに酒を呑むなあ、なんて言いながら自分だって呑んで酔っ払いながら、ご隠居がこう言ったのさ」

「なーんだ、酔ったときの言葉じゃないか。そんなこと、ご隠居はもうとっくに忘れてるよ」

「大丈夫、忘れちゃ困ると思って、そこにあった紙と鉛筆で書いておいたのよ。それを次の日にご隠居に見せたら、苦虫をかみつぶしたような顔をしてたけど認めたぜ」

「へぇー、八つぁんはそういうことになると抜け目がないんだねえ」

「あたぼうよ。俺たちの将来がかかってるんだからな」

「あれ、ちょっと待てよ。さっき『君もちょっぴりご相伴に』なんて言ったけど、ご隠居の話じゃ半分半分じゃないか。取り分が違うよ。それってピンハネじゃん」

「そ、それはなんて言うのか、まあ話のあやってやつよ。ピンハネなんて、悪い了見はこれっぽっちもねえ。も、もちろん、五分五分さあ。こっちは俺たちの明るい老後の話をもってきただけよ」。八つぁんが少ししどろもどろになった。

「わ、わかったよ。それじゃあ、八つぁん、アパートをもらったあとの俺たちの老後はどうなると思う？」

「そうよなあ、そんな金もねえし、今みたいに、ここで毎日酒をくらってるわけにはいかねえな」

「倹約しなけりゃいけない？」

「そうだなあ。まず暑い夏は涼しい日陰を見つけて椅子に座って、ビールは高いからチュウハイをちょっと呑んで昼寝だな」

「じゃあ、寒い冬は？」

「風のない天気の日には、外で日向ぼっこしてやっぱりチューハイを呑んで昼寝だな」

「天気の悪い日は？」

「しょうがないから、コタツに入って熱燗を一杯ひっかけて昼寝だな」

「なんだい、同じじゃないか。そうして気がついたら死んでるのかい？」

「馬鹿だなあ、気がつかないうちに死んでるのよ」

その後日談である。

「こら、八つぁん、熊さんから聞いたぞ。老後の青写真がチューハイと昼寝だっていうじゃないか。そのためにアパートを譲るんじゃない」

「まったく、熊って奴ときたら、あることないことくっちゃべって。せっかくのご隠居の善意なんですから、呑み屋にもいかず毎日地道に生きようって話してたんですよ。で、お金のかからない老後の生活ってことで昼寝のことを言ったんですからね。熊ってえのはそこらへんの微妙なところがわからないんですねえ」

「八つぁんのその言い分を、そうですかって真に受ける気にはならんな。お前たちの昼寝っていうのはそんな殊勝な動機とは思えんな。どうせ楽して生きようっていう魂胆だろう。まるで守株だな」
「シュシュ？　汽車ぽっぽのシュシュ？」
「昔々、宋の国の農夫が、ウサギが走ってきて木の切り株に当たって死んでしまったのを見た。そこで彼は考えた。『こいつは春から縁起がいいや。いや待てよ、きつい畑仕事なんてやってないで切り株の前で待っていればいいんだ』。そうして、毎日切り株のところで見張っていたのだが、結局、ウサギを得られないばかりか、放っておいた畑も荒れてしまった、という話さ」
「バカだねえ」
「そう、間抜けな話だが、チューハイと昼寝のどっかの二人組に似てないか？」
「チェッ、なんかっていうと小言幸兵衛なんだから。だけど昔、ホーボーを自由に放浪した人の話とは思えないね」
「おっ、そうきたか……」
「しかしねえ、問題は農夫じゃなくてウサギのほうだな。切り株にぶつかっていきなり死んじゃうなんてさあ」
「ほう、八つぁんの見立てでは、この話の味噌はウサギのほうかい。あの世で無念とか言って目を白黒させてるか。おまけに人一人の人生をくるわせちゃったんだから。お釈迦さまでもご存じあるめえ、だな」

6

「今日はここの飛び切りのチューハイにするわ」。混み合ってざわつく「大利根」の店内でも通るタカハシ記者の声だった。
「いいけど、二杯までにね。三杯呑むと足腰が立たなくなるって噂だから」とご隠居。今日はご隠居の家ではなく、場所を変えての会議？だった。
「せっかくのタカハシさんの宣言なのに、そりゃないんじゃないの。大丈夫さあ、俺なんかここのチューハイを呑むとシャンとするけどな」。八つぁんがチューハイを頼むため右手を挙げた。
「確かに、見るからに強そうね。橙色に濁ってるわ」とタカハシ。
「浅草の神谷バーの電気ブランも琥珀色だな」とご隠居が付け足した。
　ここでヒガシ探偵がご隠居、八つぁんや熊さん、そしてタカハシ記者の面々の前で話し始めた。
「この話は赤シャツさんから聞いたんだけれど……無法松さんは昔、原発で働いたことがあるんだって。福井の原発銀座だったかな。まあ、ひどいところだったらしい。そこでは原発に反対するグループがいろいろ活動していて、無法松さんもひどい待遇に腹がすえかね

て、そのグループの一つで『原発に行くな！殺されるぞ！』なんてビラを配ったりしてたそうだ。例の下手くそな小太鼓を叩いたりして」

「へえー、そんなことを松はやってたのか」と熊さんの感心したような声。

「それで、そこんところを、運動に詳しい池谷荘の組合のオカさんに訊いてみたんだ。オカさんは、昔、関西のほうで原発や水俣病などに対する反公害グループのことを聞いたことがあるといって、調べてくれたんだ。その結果、たぶん『野鳥の声』ってグループだろう。いまは活動してないみたいだけれど、一人や二人そのときの活動家がいるかもしれないって。この『野鳥の声』っていうグループの名前が気にかかるんだな。だって無法松さんは、『野鳥の会』山谷支部会員なんて自称してたんだよね。反公害じゃなくて、バードウオッチングなんだけど、その『野鳥の声』っていう反公害団体の中心人物に間違えられてやられたってことも……」

その一週間後、ヒガシ探偵は夜行バスで関西に向かった。

ヒガシは、大阪の釜ヶ崎に着くと組合の事務所を訪ね、事情を話し、その『野鳥の声』のメンバーの消息を訊いた。しかし、まるで手がかりがつまめない。もう駄目かというときに、一人が「Yさんなら知ってるかもしれないな。いろいろの運動と関わっていたから。Yさんならいま三角公園で集会の準備をしてるよ」と言ったのだ。さっそく、その三角公園にYさんを探しに行った。

「そういえば、『野鳥の声』ってグループがあったね。もう十年以上前になるかねえ。そのときは活発にというか、ちょっと過激に活動してたけどね。人数も多くなかったし、いつのまにかなくなったね。他の反公害運動に合流でもしたのかな。Iさんという人を覚えているな。噂では、横浜の寿町で日雇いをしてるってきいたけどな。でもさあ、昔だったら運動つぶしのため、その筋の奴かなんかに半殺しにされる可能性はあったかもしれないけどなあ。今頃になって……しかも無法松さんだっけ、彼は労働者で活動家じゃないんでしょ」。背中がすこし丸くなっている小柄なYさんは人懐こそうな顔をこちらに向けて目を細めた。

老活動家のYさんは「反公害運動への弾圧」については否定的だった。ヒガシは帰りのバスの中で「どうも俺はせっかちで行動が先になるな。金を使った割には成果なしか」。ただ、Iさんという当時の活動家が横浜の寄せ場の寿町にいるかもしれないという小さな情報がもたらされた。「寿に行ってみるか」

ただヒガシはすぐには寿町に行かなかった。というより、非常勤の探偵稼業、しかも今回の無法松モガキ事件では完全なボランティア活動なので、自分の生活費を稼がなければならないのだ。それから十日間は、彼は本職の日雇い稼業に戻った。

十日後、ヒガシ探偵は寿町に向かった。あらかじめ寿生活館で古参の組合員Kさんと会う約束をしていた。

横浜の寿町は山谷や釜ヶ崎と並ぶ大きな寄せ場で、そこにかつては数千人の日雇い労働者が生活していた。周辺には彼らが泊まるドヤが立ち並ぶ。JR石川町駅をおりてすぐのところにあるので、横浜の中心地といえなくもない。駅の反対側には有名な横浜中華街がある。

伊勢佐木町商店街や横浜スタジアム、山下公園も徒歩圏内だ。寿町と対照的ともいえるフェリス女学院、港の見える丘公園、そしておしゃれな元町商店街も近くに点在している。
「Iさんは、七、八年くらい前かなあ、仕事で怪我しちゃってね。日雇いができなくなって、それまで元気だったけどいっぺんに老けちゃったんだ。で、それ以来、生活保護なんだ。近くのアパートに住んでると思うよ」。Kさんはこの寿町にすでに四十年くらい住んでいた。
「話は聞けるかね」とヒガシ探偵。
「ボケちゃあいないから大丈夫だと思うけど、ただ記憶がねえ。この間なんか、えーと名前は忘れちゃったけど、昔、東京の大きなビルの建築工事をやったんだって自慢してたんだよ。でも、それが違うってわかってね。いや嘘をついてるんじゃないの。仲間がしゃべってたことを聞いてて、それをだんだん自分がやったって気になっちゃったんだろうねえ。自分と人の記憶がごちゃごちゃになっちゃってんだな。それ、わかるんだな。俺も、人のことは言えないもの」。Kさんが目をしばたたかせた。

「Iさん、初めまして、ヒガシと言います。山谷で日雇いをしながら探偵の真似事をしています」。ヒガシ探偵はKさんに連れられてIさんのアパートを訪ねた。
「日雇いの探偵さん？　それはまた珍しい」。やせ細ったIさんの髪の毛はほとんど真っ白だった。そして、顔には幾重にも皺が深く刻まれていた。ただ肉の削げ落ちた体からでも、昔の現役時代のたくましかったころの体格が想像されるのだった。
「Iさん、昔のことですが、『野鳥の声』のことをちょっとばかり訊かせてください」。ヒガシは声をすこし大きくした。
「俺は耳は大丈夫だから、声を大きくしなくていいよ。ふー、『野鳥の声』か。ついこの間のことだなあ。そんな昔じゃない。そうだな、ガンガンやったよ。車二台くらい借り切って二十名くらいで、M原発だったかな、福井の。そこに乗り込んだのよ。横断幕やのぼり、プラカード、チラシもたくさん持ってった。派手にやったさ。俺もトラメガでアジってな。ちょっと激しいデモをやって、機動隊とぶつかってパクられたのも何人かいた」
「逮捕者も出たっていうんですが、それで警察からの、例えば暴力を振るわれたなんてなかったんですか？」
「そりゃあ、あったさ。機動隊もそうだけど、警備からも、といっても普通の警備じゃなくて、どっかの組の者じゃないかと思う奴もいたよ。ただ、いきがっているほど強くないけどね。なんたって、国家暴力団の機動隊のほうが強いさ。でも組の奴らにはシノギだからなあ。原発ジプシーなんて言われてただろう。原発で働く労働者を手配して、人夫出しでピンハネしてメシのタネにするんだからさ、それはえげつないわけさ。ちょっとこっちの身の危険も感じたな」
「そうでしょうねえ。ところで、メンバーの中で、松さんって覚えてますか？」
「松？」
「デモのときなんか小さな太鼓を叩いていた」

「ああ、無法松ね」
「へえー、当時も無法松を名乗ってたんですか」
「なんて言ったっけ、その太鼓」
「小倉の乱れ太鼓」
「そうそう、それだよ。で、『無法松の一生』と松で、めでたく無法松よ。だけど、そんな由緒ある叩き方じゃなかったな」
「実は、彼が山谷でモガキ二人組にやられまして。それがどうも金目当てじゃないらしい。で、もしかしたら当時の『野鳥の声』とどこか関連があるのかと。彼が何か大事なことを握っていて、それで襲われたってことじゃなくて、『野鳥の声』に恨みを持った奴がやったとか、そういう可能性もあるのかなと思いまして。それと、無法松さんは『野鳥の会』山谷支部を名乗ってましたから。これは野鳥を実際に見る、バードウオッチングの会ですけどね。そんなこともあって間違ってやられた可能性もあるのかなと」。自信がなさそうなヒガシ探偵の言い方だった。
「なるほどねえ」
「でも、釜ヶ崎のYさんは昔のことだからそういう可能性はないんじゃないかと言ってましたが」
「いや、そうとも言えんぞ。俺たちの闘いはけっこう目立ってたから。それに昔っていったって三年前のことじゃないか」
「もうちょっと前のことじゃないですか、Iさん」。ここで、アパートに案内してくれた寿の組合員のKさんがかぶりを振った。それからしばらくしてヒガシ探偵とKさんはアパートをあとにした。
帰りの電車の中でヒガシ探偵は思った。
——Iさんの記憶はあやふやだ。その中から拾えるものは拾っていかなければならないな。「野鳥の声」グループの当時の闘いが過激だったので機動隊、それと土地のヤクザともめた。けれども、それが尾をひいて現在まで引きずっているのは考えづらい。これは釜ヶ崎のYさんの考えが正しい。だが、しかし何かひっかかる。

無法松は、目から双眼鏡をはずした。遠くの冬の野原を覗いているのに飽きたのか、目は周りの地面に移った。すると、枯れ葉の折り重なった上を何か小さい生き物が動いた。彼はこの頃、そういった自然の中の小さな動きにも敏感になっていた。よく見ると、それは二羽の小鳥だった。片ほうの手のひらに納まってしまうのではないか、と思われるほどのミニチュアサイズの鳥。二羽は、競うようにチョコチョコ細い脚で歩きながらくちばしをしきりに枯れ葉の中をつついていた。エサを探しているのだろうが、はてそれはどんな食べ物なのだろう。虫や木の実を食べるとしても、この小鳥にあった食べ物もかなり小さくなければのみ込めないだろうなあ、と無法松は思った。
「あれれ」

無法松の視線を感じとったのだろうか、突然、小鳥は餌探しをストップして、急いで繁みの中に逃げ込むように引っ込んでしまった。
「邪魔しちゃったみたいだな。でも、飛んで逃げるんじゃなくて、速足で隠れちゃったよ。そうだよなあ、あんなに小さいんじゃ、カラスに見つかったらひとたまりもないもんな。もうすこし大きくならなけりゃ、空も安心して飛べないか」
無法松はそうつぶやいたあと、そっと小鳥のあとを付いていくように逃げ込んだ繁みの中に入っていった。しかし、小鳥の姿は当然のことながら見つけることはできなかった。
「見つかるわけないよな。あれ、何だこりゃ？」。無法松はそこで何かを見た。

すこし大きめの菓子折りのような箱だった。包装紙によってくるまれていたが、それは無法松が見てもとても丁寧な包み方とはいえなかった。「誰かが捨てたのか？」。そう思って、そのまま立ち去ろうとしたが、次の瞬間、彼の頭に別の思いが閃いた。「こりゃ、もしかしたら……テレビなんかで見る密輸の取引かもしれんぞ。ということは、麻薬とか、あるいは札束がたっぷり詰まった菓子折りかも。だいいち、こんなところに物を捨てるはずがないし」
無法松はその箱を手に取った。札束がびっしり入ってるにしては、そんなに重くない。やっぱりたいしたものじゃねえか。でも、なんか別の物ってことも？　ダイヤだったらそんなに重くねえし、と思い返した。そのとき、風がピューと吹いてきた。冷たい風だった。枯れ葉が数枚、無法松の周りで舞った。なんか、危険な雰囲気だぞ。無法松は、箱を両手で抱えるようにして、そこから早く離れようとした。中身を調べたいという誘惑があったが、いつまでもここにとどまるのはまずいという直感だった。
だが、遅かった。そこに三人の男が現れた。首から双眼鏡をかけ、バードウオッチャーを装っているのだろうが、どう見てもそうは思えない。ジャンパーを着ている姿は山谷の、タチの悪い手配師を思わせた。髪の毛を短く切りそろえた恰幅のいい男は、山谷の日雇い労働者の中にもいそうだが、目つきがただものではない。パンチパーマに眉毛を剃った若い男は、まさに暴力団の下っ端そのものだった。無法松の周りをいつの間にか三人が取り囲んでいる。
「な、なんなんですか？」。ちょっとビビっている無法松。
「これは俺たちのものだから返してくれないか」。双眼鏡の男が威嚇するような声を出した。
「えっ？」
「あっちで小便をしてたんで、ちょっとそこに置いたんだ」
「三人そろってつれションかい？　拾い物をしたんで、これから警察に届けようかと思ってる」。無法松はつとめて冷静に言葉を返した。
「警察に一緒に行って確かめてもいいけどなあ。俺たちは急いでいるんだよ。拾ってもらったお礼と言っちゃあなんだが、これで」。ソフトな言いようとは反対に、いっそうきつくなった目つきの男が、一万円札を無法松に差し出した。
「そんな訳のわからない金をもらってもなあ」。無法松はおどおどしながらも精一杯の抵抗

をこころみる。
「ごちゃごちゃ言わんで、渡せばいいんだよ。そうすりゃ万事ＯＫなんだから。でないと別の方法をとるしかないぞ」。男は本性を表したかのようにすごんだかと思うと、一万円札を無法松のポケットにねじ込むと、その箱をひったくった。
「あっ」と無法松が小さい声を出した。
「もう帰っていいぞ。これから先、変なことをしないように、お前のことは覚えておくからな。おい、お前」。そして、男は下っ端の若い男を顎で指図した。無法松はしぶしぶ従うしかなかった。帰り道、数メートルほどあとから下っ端がしばらくついてきた。
「冗談じゃねえや、こちとらケタオチ飯場や暴力ヤクザと向き合ってきたんだ。ヤクザなんかこわかねえぞ」と無法松は道中、ブツブツとつぶやいていた。